

まえがき

中尾正義（総合地球環境学研究所）

オアシスプロジェクトの研究では、「現状研究」と「歴史復元研究」の二つに大別して考えています。前者は一種の素過程研究であって、現状としてどういう問題があり、それはどのような因果関係にあるのかという明らかにしようというものであり、後者は、文書やさまざまなプロクシーをつかって過去の人と自然のかかわりを復元し、今の問題を考える知恵を得ようというものです。

「現状研究」は、現地でさまざまな観測や調査をすればある程度すぐにデータが得られるものが多いのに対して、「歴史復元研究」の現地調査では、データの基となる文書や年輪試料、雪氷コア試料、湖底堆積物試料を収集することにとどまり、それをデータ化するには帰国後の読み込みや分析、解析を待たなければいけません。したがって、「歴史復元研究」ではその成果が見えてくるのが「現状研究」に比べて約一年は遅れるだろうと予想していました。

しかし、今号を見ていただけるとわかりますように、「歴史復元研究」も成果が出始めました。ラインナップは時代順に、

- （1）漢代のエチナ・オアシス（森谷）：今年初めに児島にて発表した内容のまとめ
- （2）西夏と黒河流域（佐藤）：去年7月の水曜会にて発表した西夏関連情報のまとめ
- （3）『救荒活民類要』に見るモンゴル時代の区田法（井黒）：

元の時代出版された農業技術書に著された、乾燥地農法（区田法；オウデンハウ）についての記述を手がかりとして、黒城出土文書に見える、当時のエチナにおける乾燥地農法の実態について考察した内容で、古松さんのカラホト文書解説のときに問題になったテーマ

- （4）元代カラホト文書解説（古松）：カラホト文書講読の続編で、農牧類の後半
- （5）明代エチナ史素描（井上）：

古地図と文献を使って、14世紀から16世紀にかけての、明代を中心とするエチナの歴史について、周辺の諸地域を含めて概観したもの

です。4月以降は、「歴史復元研究」の研究会を少なくとも月に一度は開くことを計画しています。詳細は後ほどご連絡いたしますが、いよいよ多種多様な成果を統合して新たに見えてくるものがありそうで、わくわくしています。